

(歩む 東日本大震災5年：1) 残したい、妹と大川小の思い出

2016年3月5日05時00分



大川小学校の旧校舎前で話す佐藤そのみさん＝宮城県石巻市、日吉健吾撮影

太平洋にそそぐ北上川の河口。ダンプカーが走り、道路工事の音が響く。その一角で、2階建ての校舎は壁が崩れ、コンクリートの柱が横たわったままだ。

宮城県石巻市の旧大川小学校。佐藤そのみさん（19）はかつての母校に、大学のある埼玉県から毎月のように足を運ぶ。

周囲から取り残されたような校舎に手をあわせ、静かに目を閉じる。

*

「大川小学校が孤立しています」。あの日の激しい揺れの後、ラジオが伝えていた。妹のみずほさん（当時12）は帰って

来ない。母の車にパンや毛布を積んで学校に向かった。途中、知り合いから、遺体が見つかったと告げられた。母と泣き崩れた。

遺体安置所から連れて帰り、ひつぎの隣でギターを弾いた。みずほさんが好きだったバンド「BUMP OF CHICKEN」の曲を口ずさんだ。

《君の願いはちゃんとかなうよ 楽しみにしておくといい》

妹は英語の通訳になるのが夢だった。「願い、かなわないじゃんねえ」。小学校を卒業するはずだった日、ひつぎは灰になった。

妹を失った大川小学校。でも、自然と足が向いた。一緒に通った校舎の赤い屋根、空の青色、包み込む木々の緑色。そして子どもたちの声は黄色。土色だけになった一帯でも、ここではカラフルな風景を思い浮かべることができた。

震災前から、ふるさとを映画に撮るのが夢だった。映画学科のある日大への進学をめざした。

学校見学会で「被災地の映画を撮りたい」と伝え、エントリーシートに体験をつづった。競争率8倍の難関を突破した。

入学してすぐ、先生は同級生を前に「佐藤は新聞に載っていた」と紹介した。妹を失いながら、夢を追う姿を取りあげられたことがあった。好奇と敬意がないまぜになった視線。「被災地の子」のイメージが広がるのを感じた。

高校時代、得意だった友だちづくりに戸惑った。意識するほど、自分から壁をつくってしまった。

同級生は専門家みたいに映画を語り、会話についていけない。ドキュメンタリーの課題で撮った映像は、ほとんど使えなかった。

「私、震災がなかったら合格していない」

講義とアルバイトの毎日に、夢に近づく手応えを感じられない。何をするために、ここにいらんだろう——。自分を見失った。

*

昨年末、同じように妹を亡くした後輩と一緒に、たまった砂をほうきで掃きながら校舎を歩いた。

中庭で練習した一輪車。色あせた本棚に並ぶ伝記や児童書。学年の終わりには窓の外に広がる景色を自由帳にスケッチした。そんな記憶がよみがえると、「もっとがんばらないと」という気持ちがわいてくる。

6年生の教室前のコートをかけるフックには、「佐藤みずほ」と妹の名が書かれたシールがまだ貼ってある。

その校舎を解体するかもしれないという話を高校2年生のときに耳にした。

74人の子どもが津波にのまれた現場。みずほさんの砂だらけの顔を、母は「ごめんね、ごめんね」と声をかけながらふいた。海水だろうか、右目から涙のようにスーッと流れた。校舎は多くの命が失われた重みを記憶する場でもある。

観光バスで来て校舎を記念撮影する人もいる。「見るたびつらい。壊してほしい」。遺族の不満を聞いたこともある。

でも、校舎がなくなって慰霊碑だけになってしまったら、何も伝えられなくなるのではないか。

2月、住民の意見を聴く集会で「校舎を残してほしい」と訴えた。市長は今月中にも結論を出す。

埼玉のアパートには、祖母に抱かれて笑顔になった妹の写真を飾っている。妹の記憶は年ごとに薄らいでゆく。これから震災にどう向きあえばいいのだろう。そう思うと、人前でもふっと涙がこぼれる。

空、田んぼ、桜並木……。撮りためた大川小一帯の色とりどりの写真を時々見かえす。まだ、ふるさとの映画のイメージは固まらない。時間をかけて、つくっていかうと思う。（岩崎生之助）



被災地の人々は、大切な人を失った悲しみを胸に刻み、いのちと向きあい続けてきた。東日本大震災から5年。その歩みをたどった。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.